

Newsletter

2009 vol. 2

2009年7月21日 発行
奈良教育大学 大学院
教育学研究科 教職開発専攻
〒630-8528 奈良市高畑町
TEL&FAX 0742-27-9354
<http://www.nara-edu.ac.jp>
発行 奈良教育大学 教職大学院広報係

目次

1. シンポジウム報告
2. 研究室だより
3. 実習科目を通して
4. 研修会等案内

1 教職大学院主催 シンポジウム報告

院生 (08年度入学) 大西 千加子

7月1日、「教職大学院での学び」をテーマにシンポジウムが開催されました。以下、概要を報告します。

6人のパネリストとコーディネーターが、和やかな雰囲気の中、お互いの考えを述べあい、率直に語り合いました。学内・学外からの参加があり、奈良県教育委員会が主催するディア・ティーチャー・プログラムについての話や、院生の生の声を聞く中で、教職大学院への進学への希望が一層高まった雰囲気を感じました。



【現時点での「教職大学院での学び」の満足度は？】

- ・模擬授業や小学校・中学校での授業観察をはじめ、研究授業等を行うことにより、自分に足りない力を知るとともに、授業を見る視点や授業構成等を学ぶことができた。大学院の先生方の手厚い指導や密度の濃い学習に満足している。
- ・子どもたちとの人間関係をつくるスキルを学ぶことができた。院生室では、現職院生や先輩、同級生からいろいろな考えを聞くことができる。特に現職院生の話は現実味があり非常に役立つ。
- ・時には先輩教員、時には同級生感覚をもって接してくれる現職院生との関わりは大変勉強になる。
(以上、ストレート院生)
- ・2年目は「理論と実践の往還」を考えている。また、ストレートマスターと関わることで自分も若いエネルギーや発想をもらい、関わり方の学びがある。多くの若い人たちと学ぶ機会はとても貴重。
(現職院生)
- ・大学院の教員も初めての経験が多く、やってみてわかる部分も多い。絶えずフィードバックしながら取り組んでいる。何を学んでもらうかを明確にしている。
(本学教員)

【これからの教職大学院の課題と改善～学校実践に関わって～】

- ・学校実践Ⅰ・Ⅱにおいて現職院生が協議に加わるにより、現職院生からも授業の視点を学ぶことができるのではないかと。
- ・学校実践Ⅰ・Ⅱで、現職院生が授業づくりの段階から関わる協働体制を作ってはどうか。
- ・学校実践Ⅲの目的を実習校に明確に伝えていかなければならないし、院生自身も実習校において、メリットを感じてもらえるよう自覚して取り組んでいきたい。
(以上、院生)
- ・ストレート院生にコンスタントな力量をつけたい。今後も院生の意見を取り入れたい。
(本学教員)

【これから先生になる人へ】

- ・明るく元気な先生は人を惹きつける。教えたい気持ちの強い先生は向上心や知的好奇心が強く成長し続ける。そんな先生を目指してほしい。
(奈良県教育委員会教職員課奥田課長補佐)

2 研究室だより

(1)子どもの心理と学びから指導を捉える



教職大学院教授 安藤 輝次

教師が四角のような事柄を教えて、子どもは、点線で示した円のような学びをしました。あなた

が教師である場合、これからどのように対処しますか？。

例えば子どもが学んでいない四角の部分で指導するという方法があります。読書算の技

能に関わる場合には、そのような教科の論理を優先させた対処が必要ですが、新学習指導要領で強調された「思考・判断・表現」の力を伸ばすためには、子どもの心理を組み込まざるを得ません。つまり、子どもが学んだという円内で四角から外れている部分に目を向けて、子どもの心理も考慮して、教師の指導を捉え直さなければなりません。

7月1日のシンポジウムの最後に院生から教職大学院の課題について「1年次最初の教育実習で授業をするのは負担が大きい」とか「現職院生が学部卒院生等に教えるような授業科目があってもよい」という声が寄せられました。

前者については、学部卒院生は、週2日の教育実習だけでなく他の授業も履修しており、負担増が大きいため、十分な授業準備ができなかったり、大学院の授業で思うような学びができなかったということもあるかもしれません。後者については、実習での授業づくりに現職院生が関わる時間を授業科目としてメンター的な学びをしてもらうという声は一考の余地がありそうです。

教職大学院では、ポートフォリオやその他さまざまな機会を使って、このような学び手である院生の皆さんの声をできるだけ拾い上げ、指導の改善に反映させるようにしています。教えるという論理を常に優先させるのではなく、院生の学びの現状から学び手の心理も汲み取り、結果的に院生の学びを最大限にすることをゴールにしています。

実は、学校の先生においても、院生を子どもと言い換えれば、同じことが言えます。その際に私の専門とする“カリキュラム”という考え方が必要になります。



(2)学力向上の取組を振り返って



教職大学院教授 小柳 和喜雄

こんにちは。小柳和喜雄（おやなぎわきお）と申します。奈良に参りまして、早10数年を経過いたしました。専門は、教育方法・教育工学で、学校での授業研究を中心に、「学校組織で学力向上等とにかくに挑むか」を中心に研究を進めてきました。

振り返ると、この間、学力向上と関わって次のような3つのことに取り組んできました。1つ目は、「子どもの学習スタイルや認識のスタイル」を考えることでした。言葉だけで分かる子どもいれば、書いてあげないと分からない子どもいる。絵や図で描いてピンとくる子どもいれば操作をして初めて分かる子、友達と話し合っただけで分かる子など多様な子がクラスにいました。そのため、教育方法として伝統的な道具と情報機器など様々な新しいメディアを組み合わせ、一見しんどそうに見える子にも用いる方法を変えることで自信を持たせ、力を引き出す可能性があることを考えてきました。2つ目は、子どもの生活環境が新しいメディアの登場などによって変わり、遊び方、コミュニケーションの仕方など変化してきました。それにより言葉の使い方なども変わり、あわせて思考の仕方なども変わりました。そこで、学力向上を考えるときに学校外の子どもの生活、現今の子ども文化を見つめ、洗練した子ども理解から今の子どもたちの持ちうる課題と可能性を見つめ、授業で大切に守るべきことと、変革していく必要があることを明確にしていくことを考えてきました。最後に、3つ目は、学力向上は、教師個人の取組を生かしつつも、学校組織で計画的に取り組む必要があり、さらに1つの学校組織を越えて（家庭学習との連携、幼保小連携、小中連携・一貫など）見通しをもった取組の必要性と、その効果的な連携の方法等を考えてきました。まだまだすることが多く、時間が足りないのを感じています。少しでもみなさんと一緒に学力向上を中心とした教育課題に挑んで行ければと思っています。一緒に取り組んでいただける方、是非お待ちしております。



(「子ども文化・リテラシーの変化」のセミナー後)

3 「実習科目」を通して

(1) 学校実践Ⅰでの学び

院生 (09年度入学) 犬伏 亜沙香



(「五、七、五ですよ、わかりますか?」)

5月14日から6月25日までの間、連携協力校である都跡小学校でお世話になりました。

「学校実践Ⅰ」では、小学校の授業や学級経営をはじめ、学校のさまざまな仕事について、観察・分析を通して学びます。ただ単に観察するだけではなく、視点やねらいをもって観察を行います。そして放課後に、検討会でディスカッションを通して私見を共有し、さらに大学院に戻ってから振り返りを行うという、かなりハードなスケジュールでしたが、深い知見を得ることができました。

一番印象に残っているのは、グループで取り組む研究授業です。グループ全員がそれまでに得た学びを持ち寄り、さらに、大学院の先生方や現職院生から指導やアドバイスをいただいて、指導案を作ります。入学してから2ヶ月ですが、毎日、濃密な時間を過ごしています。自分としても納得できる授業ができたと思うと同時に、課題も見えてきました。

今後は、「学校実践Ⅰ」に次ぐ「授業省察」という講義でさらに授業の分析を行います。よりよく実践する方策を見出すことで、「学校実践Ⅲ」につなげ、自分を高めていきたいと考えています。

(2) 学校実践Ⅱでの学び

院生 (09年度入学) 奥山 登康

私は「学校実践Ⅱ」の取り組みとして、奈良市立飛鳥中学校で3年4組の英語の授業をさせていただきました。本時の主題を「現在完了の経験用法の肯定文表現」と設定しました。3年4組の英語の授業を担当しておられる西川先生との打ち合わせの中で、次時に教科書を用いて、英語を「読む」、そして本文の日本語訳を行う活動を中心に授業を構成していただけるとの話が出ました。それで、私の授業では、英語を「聞く」「話す」「書く」を中心に授業を組み立てました。特に、「聞く」「話す」を重視していたので、敢えてノートを取らせずに生徒達が自分の耳と口を使って、「聞く」「話す」ことを飽きずにできるように次のように工夫を凝らしました。

自己紹介からスムーズに授業内容に入っていく構成、多くの写真や具体物といった視覚教材の利用、教師(4名のT2の院生も含む)の実際の経験や生徒達自身の実際の経験を教材にするといったリアリティの重視、生徒が英語に触れている時間をできるだけ確保する活動等が具体的に工夫したところです。

研究討議では、「音読の声が出ていた」「予想していたよりも英語を聞く、話すことができていた」「書くこともよくできていた」という意見が出ました。

しかし、ノートを取らせなかったことも影響し、集中力を切らす生徒が何人か見受けられたこと、声の抑揚や間の取り方、指名を含んだ生徒理解、まとめの方法等の課題も明確化されました。この経験は自分自身の大きな学びになったと思います。T2として授業を手伝って下さった院生、模擬授業に参加しアドバイスして下さった院生、そして、精神的にも大きな支えになり、的確な指導をして下さった大学院の先生方に深く感謝の意を表したいと思います。



(「みなさんしっかり聞いて!」)

(3) 学校実践Ⅳ 肌で感じる「理論と実践の往還」

院生 (08年度入学) 棚橋 浩一

目標とする教師像を「リーダー・調整役としての教師」とし、自己の研究課題を「学校組織の活性化に向けて」—主幹職を通してメンターとしての在り方を考える—と設定し、この教職大学院で学び始めて早一年以上が過ぎました。この四月からは中学校現場に戻り、これまでの学びをもとに、教職大学院のメインテーマである「理論と実践の往還」に日々取り組んでいます。



具体的には、学校組織を活性化し、学校の教育力（学校力）の向上に果たすべきメンターとしてのミドルリーダー教員の役割について、主幹職の在り方を通して考察し、主幹教諭として組織の活性化に向けての取組を行っています。

6月に行われた学校実践Ⅳにおいては、研究課題に基づくこれまでの取組について、教職大学院の先生方とのディスカッション及び指導・助言等により、取組の改善や今後の取組に対する大きな示唆をいただくことができ、多くの学びを得ることができました。学びを即、実践に活かせるという現在の環境は、未熟な自分にとって大変ありがたく、貴重なものであり、実践に向けてのモチベーションの維持、向上に資するものであります。今後も自己の実践的指導力を向上させ、絶え間なく成長を続けるために努力していきたいと考えています。

また、今の自分が様々なことに取り組んでいくことができているのは、教職大学院の先生方や学びを共にしている仲間、そして現場の管理職や同僚の先生方の支えのお陰であると実感しています。多くの仲間の支えと協働のなかで、笑顔のあふれる、よりよい学校づくりに邁進していきたいと思っています。

4 研修会等案内

・カリキュラムフレームワークによる能動的な学びの創造

日時： 9月17日（木）※時間、詳細は未定です。追って連絡します。

場所： 参加申込先： 奈良教育大学入試課 TEL. 0742-27-9126

FAX. 0742-27-9145 <http://www.nara-edu.ac.jp>

<個別相談会の実施>

教職大学院では、入試に関する個別相談を随時実施しております。

事前に、事務室までお申し込みください。

教職大学院 事務室 TEL&FAX 0742-27-9354

☆ 編集後記

「社会人基礎力」という言葉を時々目にする。「職場や地域社会の中で、人々と関り仕事をしていく上で必要とされる基礎的な能力」をさす。「ここ数年間に入社した新社会人に特に不足している」という企業側からの指摘を受け、経済産業省が定義した言葉である。その能力については、①「前に踏み出す力（Action）」、②「考え抜く力（Thinking）」、③「チームで働く力（Teamwork）」の3点に集約している。同省では今後こうした基礎力を身につけさせる対策の導入を各大学に求めていくという。今回のこのニューズレターの発行にあたっては、前号から更に進めて担当院生がほとんど全てを行った。限られた時間の中で見事な連携を見せた。手前味噌で恐縮ではあるが、本学教職大学院生の「社会人基礎力」については、「ほぼ問題無し」を実感した。

(文責 小谷)